

聖書：マタイ 7：12

説教題：黄金律

日時：2018年10月28日（朝拝）

今日のみことばは一般に「黄金律」と呼ばれます（英語ではゴールデン・ルール）。まず最初の「ですから」という部分に注目したいと思います。これはこの言葉がこれまでの話の流れを受けて語られたものであることを示しています。それはどこを受けているのでしょうか。ある人は直前の7～11節を受けていると見ます。7～11節では神が私たちの祈りに聞いてくださり、良いものだけをくださると言われました。神がこのように私たちに良くしてくださるのだから、そのことに感謝して、私たちが他の人に良くする、すなわち自分がしてもらいたいようにすべきであると。またある人はさらにその前の7章1～6節との関連を見ます。そこでは「さばいてはいけません」と言われました。それを受けて、私たちは他人をさばくのではなく、自分がしてもらいたい通りに他の人に関わるべきであると。しかしもう少し視野を広げてこの言葉を見る方が良いと思います。イエス様は今日の節後半で「これが律法と預言者です」と言っておられますが、この表現は前に出て来ました。5章17節です。イエス様はそこで「わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」と言われました。「律法と預言者」とは、一言で言えば旧約聖書を指しています。イエス様はその旧約聖書を否定し、廃棄するために来たのではない。むしろ成就するために来た。そしてその律法や預言者の真意は何かを、これまでずっと解説して来られました。そうして今日の7章12節で「ですから」と語り、「これが律法と預言者です。」と言っておられます。ですからイエス様はこれまでの教えをここで一言で要約しておられると見ることができます。

イエス様は「人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい」と言っておられますが、私たちが人と関わる時の原則はどういうものでしょうか。おそらくこれではないでしょうか。「人が私にしたように、私もその人にする。」相手が自分に親切にしてくれたら私も相手に親切にする。相手が私を傷つけたら私も相手に復讐する。すなわち相手の出方次第で私の行動が決まるというあり方です。しかしこれは言い換えれば人に支配されている生活です。これでは自分が願うような生き方はできず、いつも目の前の人に振り回される生活、相手に縛られた生活になってしまいます。イエス様はそのように相手がどうしたかで自分の態度を決めるのではなく、相手によら

ず自分が人にして欲しいと思うことを他の人にする生き方をせよと言っています。

似た言葉としてしばしば引き合いに出されるのは、この否定的な表現です。それは「自分がして欲しくないことは、他の人にもするな」というもの。イエス様がおられた当時、ラビ・ヒレルという有名な先生がいて、その先生に異邦人からの改宗者を志す人が質問したそうです。律法はあまりにも煩雑で、そのすべてを覚え、実行することは難しいと思ったからでしょう。「先生、異邦人である私が、片足で立ってられる間に、律法の全体は何かをまとめて教えて下さい」と。片足で立ってられる時間は2〜3分でしょうか。しかしさすがヒレル先生。もっと短い時間でこう答えたそうです。「あなたが嫌だと思うことは、他のどんな人にもしてはならない。これが律法の全体であって、他のすべてはこの注釈に過ぎない。さあ行って、このことを学んで来なさい。」と。もし私たちがこれを実践したら、それだけでこの世界はどんなに変わるのでしょうか。たとえば私たちは自分の悪口や陰口を言って欲しいとは思いません。ところが私たちはしばしば好きではないと思っている人の悪いうわさや中傷じみた言葉を陰で流します。そのことを反省し、自分がしてほしくないことは他の人にもしない。このルールに従って生きるだけで、世界は今よりずっと平和で争いが少なくなる場所となるに違いありません。

しかしイエス様の言葉はこれよりはるか先を行くものです。先の「自分にしてほしくないことは、他の人にもするな」という教えを守るには、ある意味では何もしなければいいのです。やり返したくなる相手から離れ、その人と関係を持たないようにすればいい。しかしイエス様が言っていることは、自分がして欲しいと思うことを他の人にも積極的にせよ！ということです。人様に迷惑をかけなければいいという消極的な話ではありません。あなたは立って周りの人に積極的に善を行わなければならない。されたら嫌だと思うことをしないでなく、されたら嬉しいと思うことを他の人に対して自分から行う。これは良く考えるととてつもない要求であることが分かって来ます。

果たして私たちはそのように歩んでいるのでしょうか。私たちはこうしてもらいたいという思いを色々持っています。自分の伴侶にしてもらいたいこと、自分の親にしてほしいこと、子どもにしてほしいこと、また職場の同僚や学校の友だちにしてほしいこと、近所の人にしてほしいこと、また教会の兄弟姉妹に期待すること、等々。色々あると思います。感謝やねぎらいの言葉を一言かけて欲しい。私の話を聞いて私の気持ちを理解し、共感して欲しい、もっとやさしく語りかけて欲しい、あるいは少なくとも挨拶して

欲しい、安否をたずねて欲しい、今何を考えているのか聞いて欲しい、あるいは赦して欲しい、長所を認めて欲しい、あるいはどこか遊びに行く時に一緒に誘って欲しい……。そう思うなら、あなたがそれを他の人に実行するように！とされています。相手がそうしてくれたら私もするのではなく、相手がどうであろうと自分がしてほしいと思うことを他の人にその通りして行く。そう考える時、これはとてつもなく大変で骨の折れることだと分かって来ます。人には色々要求するけれど、自分からそれを行うことを考えると突然腰が重くなる。そしてもうこのことについて考えることはやめにしたい。この話は早く終わりにしたいと思う。なぜそうなのでしょう。それはそれだけ私たちが自分中心、自己中心な人間であるからに他なりません。

イエス様はこれが「律法と預言者です」と言われましたが、この表現はもう一回、この福音書に出て来ます。それは22章40節です。イエス様はそこである人に「律法の中でどの戒めが一番重要ですか」と尋ねられて二つのことを答えられました。「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」と「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」の二つです。そして「この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです」と言われました。ですからそこで言われた「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という言葉も、今日見ている黄金律と本質的に同じと言えます。私たちの自分を愛する愛には限りがありません。他の人のためにはケチっても、自分のためにはどんな時間も労力も惜しみません。何でも必死に取り組みますし、お金も使いますし、犠牲も厭いません。しかしそれと同じように他の人を愛せよとあります。私たちはこれを聞いて、無理だ～！と言いたくなります。私には他の人のことなど考えている余裕はなく、自分のことだけで精一杯である。他の人のことを自分のことと同じように考えることなどできない。そう言って、まず自分のことを考える生き方を守ろうとする。そして「まずは自分」「まずは自分」と考えている内に、時にはその自分の必要のために誰かを見捨てたり、切り捨てたり、誰かに犠牲を強いることになってもやむなしとする。そんな私たちにとって今日のような御言葉は都合が悪いのです。クリスチャンであっても、このような教えを心の深いところでは敬遠し、ここは見なかったこと、聞かなかったことにしたいと思いたくなるのです。そしてもっと別のどこか恵まれる御言葉を読んで心を落ち着けたい、などと思ったりする。しかしそれで良いのでしょうか。これはゴールデン・ルールなのに、イエス様の教えのエッセンスとも言うべきこの重要な御言葉を退けて、それでいながら自分は信仰生活を送っているというようなことはあり得るのでしょうか。

この御言葉を考える上で大切なことは、この通りに歩まれた方がいるということに目を留めることだと思います。それはイエス様です。この言葉を最初に語られたのはイエス様であったと言われますが、それもそのはず、この通りに生きた人はイエス様以外にいなかったからです。イエス様の生涯はまさにこのみことばの通りの生涯でした。イエス様は周りからこのようにしてもらいたい、このように自分は扱ってもらいたいと考えて歩まれたのではなく、いつも他の人の益を考えてご自身をささげて歩まれました。ピリピ人への手紙2章に、キリストは神であられるのに、その神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を「無」にして仕える者の姿を取ったとあります。イエス様は「私は」「私は」という、まず自分を上に持って来る自己主張の生き方をしたのではなく、むしろご自分をへりくだらせ、私たちの救いのためにご自分を卑しくし、その究極としてその尊い命を十字架上で私たちの身代わりとしてささげてくださいました。十字架に架けられる時も、ご自身に向かって感謝もせず、ののしりあざける敵のためにこう祈られました。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分が何をしているのか分かっていないのです」と。まさに自分がしてほしいと思う通りに他の人にもするという生き方を最後まで貫かれました。こうして、この方に信頼する私たちの罪は赦され、永遠のいのちを持つことができる道が開かれました。

しかし聖書が語るグッド・ニュースは、このイエス様を信じる人はその罪を赦され、永遠の滅びを免れる者になるということだけではありません。それとともに聖書は、私たちがそれまでの古い自分に死んで、新しい人に造り変えられるということも述べています。私たちの上にあった罪の支配体制をイエス様が根本的に打ち砕いてくださったことによって、信じる者たちは復活のイエス様の恵みが注がれて新しい人とされる。その新しい状態に移行した人の前に開かれているのが、イエス様のように生きる者となること、イエス様に似る者へ日々変えられて行くこと、すなわちこの7章12節に従って生きる者となることです。

確かに地上にある限り、私たちは完全な状態には達しません。ですから今日の御言葉を完全に守れる者にはなれません。しかしだからと言って、その反対にこの黄金律は地上にある私たちには不可能な、単なる理想論に過ぎないものと考えてもなりません。これは私たちにとって大いなる目標であると同時に、今や日々一歩一歩にじり寄って行くべき御言葉でもあります。イエス様は私たちにはできないみことばとして語られたのでは

なく、今や私たちの前に実現可能な御言葉として語っておられます。イエス様は5章20節で「あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません」と言われましたが、まさにここに歩むことがパリサイ人らの義にまさる義に歩むことです。これはイエス様が私たちに可能にしてくださることです。イエス様の日々造り変えてくださる力によって私たちが取り組んで行けることですし、その取り組の延長に天の御国での生活があるのです。イエス様を信じて救われたと言いながら、この道を進もうとしない人は、目標を見失って天国への旅をやめてしまったような人です。救われるとは律法と預言者が指し示す基準に沿って益々生きる人になることを含みます。その歩みの到達地点に天国があるのです。そしてそのような生活を通して、私たちは私たちがこのように導いてくださる天の父の栄光を現わす歩みができるのです。

改めてとてつもない要求です。ただこれだけを見るなら、誰にこんなことができるだろうか！と絶望するような御言葉です。しかし私たちがいつも思うべきは、これはイエス様が実際に歩まれた道であるということです。イエス様はご自身と同じように私たちが愛してくださり、この通りに生きてくださいました。自分にしてもらいたいことを他の人にもそのようにするという生き方をしてくださいました。そのイエス様によって救いをいただいた私たちです。そしてその私たちの前にも、今やイエス様にならって律法と預言者が指し示す道に歩むという生活が備えられています。私たちはそのことを心から感謝し、また勇気を得て、この御言葉を行うことに取り組みたいです。前の7～11節には、祈り求めるなら神はその願いに聞いて良いものをくださると言われました。その神に祈りつつ、神が私たちに定めてくださった素晴らしいゴールに向かって日々前進し、そこに用意されている真の幸いを味わい、その私たちの歩みを見る人々が天の父の御名を賛美することへと至る、そのような歩みへ進んで行きたいと思います。